

ー第1次世界大戦中のイエメンとトルコ並びにラヘジュへの侵攻ー

イマーム・ヤヒヤーとオスマーン帝国との間で締結された和平協定はヘジラ暦1329年（西暦1911年）に効力を発したにもかかわらず（注1）、イマーム・ヤヒヤーはヘジラ暦1337年になるまでサヌアーへ入城しなかった。

（注1）：「イエメンのオスマーン統治」 ファルーク・オスマーン・アバーザ著 P.295

この事は連合国（協商国とも呼ばれ、イギリス、フランス、ロシアが中心となっていた）と枢軸国（ドイツとその同盟国であるトルコとオーストリア、第1次世界大戦後にこれらの諸国は衰退する）との間で締結されたムードロス（アラビア名マンドラス）休戦協定に基づいて、トルコがサヌアーからそしてイエメン全土から撤退した後の出来事であった。ムードロス協定は、以下の事を規定していた。

即ち（第1に）トルコ軍が、イドリースの軍隊が拠点置いていたアシール地方を含むイエメン、ヒジャーズ地方、シリア、イラクから撤退すること。

（第2に）トルコの保護州が連合国に降伏すること。付け加えて（第3に）連合国が、トルコに対して休戦のための代価を課すという条件であった。

この協定が締結されたのは西暦1918年10月20日（訳注：実際には10月30日、恐らく誤植であろう）のことであった。

未だにトルコの権力が浸透している北部には、タイズ、イップ、リダーア出身のイエメン人とトルコ人がいた（注2）。同様に南部には、ハワーシブとダーリフ出身の者がいた。

（注2）：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」 アハマド・ファドル・ムフセン・アルアブダリー著 P.127

彼等はアリー・サイード・パシヤ陸軍少将の指揮の元に、ラヘジュそしてアッシュェイフ・オスマーンを攻撃し、第1次世界大戦の初め頃、厳密に言えば西暦1915年（ヘジラ暦1333年）には2つの地方を征服することに成功した。アデン征服の目的は、表面的にはそこからイギリス軍を撤退させること、またエジプト防衛からイギリス軍の気をそらすことを意図することによって、イギリス軍を分散させることであった。

ハワーシブ軍と恐らくはダーリフ軍もこの攻撃において、イエメン・トルコ連合軍に強制的に参加させられた。これはラヘジュ及び、それ以外の南部の人々と保護契約を結んだイギリス軍の防衛力を衰退させるためであった。また南部のスルターン、アミール等全員は、この攻撃を阻止するために、ラヘジュを支援する動きをとらなかった。またこの攻撃は上述の真の目的以外には正当化され得ないものであった。

歴史家のアフマド・ファドリ・アルアブダリーは彼の歴史書の中で、アリー・サイード・パシヤ陸軍

少将と共に駐屯していたトルコ兵士の食料を確保するのがもう1つの目的であった、と強調している。ラヘジュのスルターンはイエメン・トルコ連合攻撃軍のために道を開かず、また直接イギリス軍と戦うためにアデン方面に進軍する自由を与えなかった。この事は彼等がこの攻撃開始前にラヘジュ代表との話し合いの折りにも確認されていた。

(写真55：会議の記念写真、タイズの知事サイード・パシヤ、タイズ州司法官、ジハード（聖戦）の指導者の面々注：この翻訳には写真の添付はない)

サイード・パシヤ陸軍少将は、ラヘジュのスルターン宛への通信で、アデンへの道を連合軍に開けてくれるように依頼したが、その中で自分の決意を確信しつつ、ラヘジュ攻撃の準備をしていった。そして彼の元から、またイエメン総督マフムード・ナディームを通じて、スルターン・アリー・ブン・アフマド・アリー・ブン・ムフシン・アルアブダリーと会見するための代表を派遣し、道を開けることを彼に説得させたのだった。

歴史家のアルアブダリーは前述の歴史書の中でこの事について次の様に述べている（注3）。

(注3)：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」 アハマド・ファドル・ムフセン・アルアブダリー著 P. 209

「ジュマダー・アルアーヘラ月にはハワーシブの地よりムハンマド・ナーシル・ムクビル・アッサラーリー・パシヤとアブドルラハマーン・ブン・アリー・アルハッダード裁判官（カーディー）そしてシャイフ（首長）のアハマド・ヌウマーンとシャイフのカーイド・サーリフそしてまたシャイフのサーリフ・アッタイー等が、ジュール・ムドラムに到来し、ラヘジュのスルターンのアリー・ブン・アフマドとの、もしくはその代理者との会見を求めた。

そして代表者達と同等の地位にあるムフセン・ファドルが会うことになった。約束だの脅迫だのを使いつつ、スルターンの気を引くのに、また大英帝国やその連合国に対する戦いにおいて、彼等に加わることをスルターンに希望させるために、前述の者たちは体裁が良かった。彼等はイエメン総督マフムード・ナディーム・ベクのラヘジュのスルターン宛の書簡を携えていた。内容は次の様なものであった。

「慈悲深く、慈愛あまねき神の御名において、寛大なる首長の中の首長、栄光と慎みの持ち主、我等が親愛なる友、スルターン・アリー・ブン・アフマド—神が彼を保護されんことを—永久で完全な平安と神の恩典を（祈願した）後で、我々は次の様に表明するものであります。

大学者閣下であられるタイズ州の裁判官アブドルラハマーン閣下側からの書簡に添えて、我等の件に関して、イマーム閣下—神が彼を保護されんことを—の書簡が閣下宛にしたためられ、これら2書簡においては望むところと現実とが表されています。

その様な理由で上述の裁判官が、タイズ州のジハード（聖戦）の戦士達の長達、即ち彼等はアルカマ—イラ地区の長のナーシル・パシヤとアルハジャリーヤ地区の長のアハマド・ヌウマーン・ベク、カタバ地区の長の代理のシェイフ（首長）であるカーイド・サーリフそしてリダー行政区のシャイ

フの一人であるサーリフ・タイリー・パシヤ等を伴い、神やその使徒が嘉し、イスラーム教の強化や言論の一致を有する貴公等との合意、及び交渉の為の決意が成された次第であります。

この件に関し必要な指示は彼等に与えており、我々は貴公等、また我等が同胞である全てのラヘジュの首長達、そして寛大なる貴公等の親族全員の宗教に鑑み、唯一の宗教の勝利へと急がれることを請うものであります。もし貴公等が当初から交渉において、迅速かつ完全にこちら側に立つ榮譽を望まれますならば、我々は感謝致します。また神が貴公等を守られ、神が満足いくことに対して、彼が我等皆に幸運を与えられることでしょうか。貴公等が望まれるより長く栄えられんことを。」

ヘジラ暦1333年第2 ジュマードー月14日、西暦1918年4月16日

軍事指揮官 アリー・サイード大佐 イエメン総督マフムード・ナディーム

さてイマーム・ヤヒヤーはラヘジュ侵攻においては、中立の立場を保持していたが、マフムード・ナディームの要請に応じて、前述のラヘジュ領主であるスルターン・アリー・ブン・アハマドに書簡を送った。

ヤヒヤーはラヘジュのスルターンに宗教の統合、トルコへの友好関係を促していた。またイマーム・ヤヒヤーは同様にラヘジュをトルコ側に引き込むための試みとして、彼の代表としてムハンマド・ブン・アリー・アッシャリーフを派遣した。イマーム・ヤヒヤーのこの戦争における立場は、トルコに対する同情を伴った「水のみ場」的なものであったが、本来は全くの中立であった。

またイギリスとその友好国からの敵対行為に対して（自らを）危険に晒すこともなかった。前にも述べた「時の贈り物」（注4）に出てきた様に、イマームは状況の変化と環境の助力に沿って、この戦争を利用する適当な機会を待ち構えていた。

（注4）：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」 アハマド・ファドル・ムフセン・アルアブダリー著 P.209

ラヘジュのスルターンはラヘジュ・イギリス間の同盟条約締結を論拠にイギリスを駆逐する考えを認めず、ラヘジュ侵攻の遂行がなされることとなる。ラヘジュを包囲したイエメン・トルコ連合軍に関していうと、それは次の様な軍団に分かれていた（注5）。

（注5）：同掲書 P.208

（第一軍団）ムハンマド・ナーシル・パシヤ中佐の指揮下には、アルカマーイラ地方の部族が付いた。

（第二軍団）アハマド・パシヤの指揮下には、タイズの周辺とサビル山地方からやって来た部族が付いた。

（第三軍団）アブドッラー・ブン・ヤヒヤーの指揮下には、ダバーブ地方とハバシー山の部族が付いた。

(第四軍団) ユーセフ・ハサン中佐の指揮下には(イップ県の)アルウッディーン地方の部族が付いた。

(第五軍団) ヤース・ベク中佐の指揮下には、イップとジブラとその周辺の部族が付いた。

(第六軍団) アブドゥルカーデル・ヌウマーンの指揮下には、(ハドラマウトの)ハジャリーヤの部族が付いた。この部隊はアッカーン街道から来て(南方の)ハワーシブ県の大隊と合流した。

(第七軍団) スルターンのアリー・マーニア・アルハウシビーの指揮下には、ハワーシブ県の部族が付いた。

これらの(文民による)非正規軍の指導者の大物達は、ムジャーヒディーン(聖戦を行う者達)という名で呼ばれ、彼等には地方行政の多くの長達が従った。そしてイスマイル・アル・アスワド中尉の指揮下にある推定400人の兵士から成る歩兵大隊が、アラブ人達に合流、これらの軍団には若者達のグループが加わっていた。一方、トルコの正規軍も存在していた。それは約2300人のトルコ人や、シリア人の兵士達から成る3連隊より構成されていた。

それからその出典は、ラヘジュの首都アルハウタ攻撃の際のトルコ正規軍の諸大隊、及びその指揮官達や配置、また諸大隊所有の大砲の数や種類やサイズについて詳述し、以下の様に言っている。

「攻撃軍兵士の全員は、非正規軍の者達と正規軍から成り、その数は8000人を上回っていた。そしてアッダキームとザイダ(の守備)には、この軍隊の内でも一個小隊が残っただけであった」。

上述の出典は付け加えている、即ち町の家々は彼等で満ちていた。彼等はラマダーン月16日まで滞在したが、その折り倉庫について取り仕切る委員達は、総司令官に対して或る報告書を提出し、その中で次の様に不平をこぼしている。

即ちアラブ人達への給与としてどんなに多額の費用がかかるか、そしてこの様な状態が全て継続したならば、最終的には給与を浪費し尽くして正規軍を飢えさせる、という事態に至であろう、と。

そこでパシャがアラブ人の主だった者達にラマダーン明けの祭りのために彼等の国へ戻るように、との命令を出したので、首長達はイエメンの故郷に帰ったのだった。彼等とは以下の人達である：アッシャイフ・ムクビル・ブン・パシャとアッシャイフ・ナージー・ブン・ムフセン・アブー・ラースそしてアッシャイフ・ハムード・ブン・アブドゥラッブ・スンナーニとムハンマド・イスマーイール・パースラーマまたアッシャイフ・アリー・ブン・アブドゥラッブ・アルアタービーとアッシャイフ・アブドゥラッブ・ブン・アルバダリーまたアッシャイフ・ファーリウ・アーイドとアッシャイフ・ハムード・アルバトルまたアッシャイフ・ムハンマド・アブドゥラッブ・アッシャビービーとその他の首長達のグループ、及び戦闘員の男達のうち彼等に従う者全てである。彼等は戦利品、良き品々、貯蔵品、上掛け毛布、家具、衣類、書籍等のうち、優れたものを彼等の国へ運んでいった。

その出典(注6)は、ラヘジュにおいて連合軍が犯した略奪に関して述べているが、次のことも付け加えてもいる。「しかしながら、ムジャーヒディーン(戦士達)の誰一人としてラヘジュの子供達を売り飛ばす為にとか、娘を右手が所有するものと考慮して、玩んだりする為に虜にすることを思いついた者はいなかった、と言われているが、それは真実であった。これは、カリフのアルマハディーの取り巻き

の中のアルブッカーラ族のムジャーヒディーンや、カリフのアッタアユシイーがスーダンの人々に対して為したことを思えば、神に感謝すべきであった」。

(注6)：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」 アハマド・ファドル・ムフセン・アルアブダリー著 P. 220

1333年シャアバーン月22日にラヘジュ・スルターン国の首都アルハウタ市をイエメン・トルコ連合軍が占領した(注7)。アルハウタ市の防御軍は、攻撃が行われた当日にはスルターンの軍隊とアデンの軍隊でその総数は700名を越えていたが、彼等は英雄的な戦いを遂行していた。スルターンのアリー・ブン・アハマド・ブン・アリー・ブン・ムフセン・アルアブダリーは夜明け前にアルハウタ市脱出していた。しかし彼は、彼を敵と思ったインド人達の奇襲にあい、7発の弾丸を打ち込まれ、彼の乗り馬を殺された。彼は城に怪我をして運ばれ、日の出後までそこに留まった。そして城に残った軍隊が彼を担ぎ城から出て、途中アッリバートの近くで車に出会い、アデンに運ばれた。

(注7)：同掲書 P. 217

前述の年のラマダーン月の最初の水曜日の夜(注8)に、前述のスルターンのアリー・ブン・アハマドが死去した。彼の後を、彼の父方の叔父の息子であるスルターンのアブドゥルカリーム・ファドル・ブン・アリーが継いだ。彼はスルターンと共に居を移していたのであった。

(注8)：同掲書 P. 221

連合軍によるラヘジュ占領の直後には、4000人かそれ以上のその地方の上流階級の人々、スルターンの随行者や親類達、また諸部族の首長達が放浪することとなった。そしてアデンやアルマアラ、ベッル・アハマド、アッシャイフ・オスマーン、アルアマード、アビーン、サヒーブ或いはそれ以外の土地等に分散して行った。同様に連合軍は同年のシャアバーン月の下旬には、アッシャイフ・オスマーンを占領した(注9)。

(注9)：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」 アハマド・ファドル・ムフセン・アルアブダリー著 P. 220

アリー・サイード・パシャ少将はラヘジュに3年間滞在した。彼がラヘジュを攻撃して以来、第1次世界大戦までの期間において、彼は自分の滞在中にラヘジュから、或いはラヘジュへの輸出入品に課税していたのであった。

そして1918年10月31日(ヘジラ暦1336年ズルヘッジャ月25日)連合国とトルコの間に休戦協定が締結されたのであった(注10)。この協定はムードロス条約として知られている。

(注10)：「イエメンのオスマーン統治」 ファルーク・オスマーン・アバーザ著 P. 295

イギリスとその同盟国は、その条約の中でトルコに対し、対トルコ戦を停止することの見返りとして、

幾つかの条件を望んでいたが、それは次のような事項だった。

即ちダーダネルス海峡及びボスポラス海峡の解放、トルコ軍の軍備縮小、トルコの戦闘用船舶の受渡し、連合国の汽船によるトルコの港湾の使用許可、ヒジャーズとアシール（この両地をムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーは本拠地としていた）及びシリアとイラクにおけるトルコ守備隊の降伏、並びに北アフリカのトルコの諸港の降伏等であった。

サイード・パシャ少将は（注11）、前記の休戦協定に基づくトルコの降伏について、アデンの知事であるスチュワート將軍を通じて伝えられた。

（注11）：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」 アハマド・ファドル・ムフセン・アルアブダリー著 P. 241

サイード・パシャ少将は撤退の命令を受け入れることも、前述のアデン知事にラヘジュを引き渡すことにも躊躇しなかった。この事は、スチュワート將軍がアデンへ到着し、また撤退の計画がなされた旨の報告を受け取った直後のことであり、かつトルコの総督であるアハマド・イゼットからサイード・パシャ少将の元に届いた命令によるものであった。それからサイード・パシャ少将はアデンを引き渡してから少し後に、そこからトルコへ向けて出発したが、それは以下の如くである。

「激しい遣り取りが、サイード・パシャ少将とサヌアーのトルコ軍の指揮官であるアハマド・タウフィークとの間、及び少将とサヌアーのオスマーン帝国の総督であるマフムード・ナディームとの間で取り交わされた。イマーム・ヤヒヤーは、ラヘジュの引渡否認という観点から、タウフィークとナディーム2人の立場を支援したが、その論拠はトルコが降伏した、というニュースの源がイギリスであって、トルコ政府ではなかったからであった。

しかしながらサイード・パシャは自分の立場に固執し、彼等2人が書簡や宣伝した中で、サイード・パシャの名譽を毀損したとして、彼等2人の立場を非難した。またサイード・パシャは自分の軍隊と共にした苦勞や犠牲を主張したが、一方書簡によれば、サヌアーにいた連中は、安全で平和で安定しており、酒の杯を傾けていた。

サイード・パシャはイマーム・ヤヒヤーに対して、もしヤヒヤーが、サイード・パシャがイエメンに対し持っている真摯さを信ずるに値すると評価するならば、ラヘジュの受取を急ぐように呼び掛けた。

アリー・サイード・パシャ少将は降伏し、自分自身の身柄と軍隊、兵器、弾薬とをアデン総督スチュワートに引き渡した。それはヘジラ暦1337年ラビーウ・アルアウル月（西暦1918年12月）のことであった（注12）。この事はラヘジュの倉庫に貯蔵されている穀物の全てを売却した後のことであり、彼の将校達はその武器を、一本の劍の値段5エジプト・キルシュという安価な値段で売り払った後のことであった。

（注12）：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」 アハマド・ファドル・ムフセン・アルアブダリー著 P. 220/「イエメンのオスマーン統治」 ファルーク・オスマーン・アバーザ著 P.

かくしてイギリスの将軍パティは、ラヘジュを手に入れたのであった。一方サイドと彼の軍隊は、イエメン各地に残っている同胞達がやって来るまでの数日間、アデンに留まった。その同胞達は海岸地域、取り分け（紅海岸の）ルハイヤやホダイダに、イギリスの蒸気船によって運ばれて集結した。そして降伏したオスマーン軍の全部隊は、それらの港からイギリスの蒸気船でマルタ島へ行き、更にその後、同じ船で彼等の国である（トルコの）アナトリアへと輸送されたのである。

ラヘジュの新スルターンであるアブドゥルカリーム・ファドルと彼の一族、更に王族や閣僚達がラヘジュに戻って来た。そして彼等に随行して前述のアデン総督スチュワートもいた。それはヘジラ暦1337年ラビーウ・アルアウワル月17日のことであった。スルターン・ラヘジュ国の首都アルハウタへの入城は、熱狂的な式典の中で行われた。その式典において、総督とスルターン双方から群衆に向け演説が行われ、言葉が交わされた。

一方、アルハウタを占領した直後にアッシュエイフ・オスマーンも占領したトルコの軍隊は、イギリスがアデンからそこへ到着した為に、撤退を余儀無くされた。というのはイギリス軍がアデン防衛の最前線としてアルハウタを利用するために、その返還を望んでいたからであった。尤もラヘジュとアデンの防衛の必要性は、その時には消滅していた。

またイマーム・ヤヒヤーといえは、彼はラヘジュの侵略に関しては、第1次世界大戦そのものにおいてそうしたように、中立の立場を守り続けた。

ローマ暦1934年10月、ヘジラ暦1336年ズルヒッジャ月、西暦1918年12月、サイド・パシャ少将がサナア駐在のトルコ軍団長に宛てた呼び掛けは、呼応されなかった（注13）。この呼び掛けは、イマーム・ヤヒヤーに直接はなされなかったが、「忠誠的愛国心に満ちた情熱を備えた者の急派とまた時期を逃さぬ内にパーブルマンダブ海峡やラヘジュを受領する派遣団を送る必要性を認識している方々に、この事を伝達して下さいますように、皆様に時に切望しております」と要約され伝えられた。これはイマーム・ヤヒヤーにとってイギリスの浸透力を減少させ、またイエメンを統一に戻す積極的な第一歩となる貴重なチャンスであった。

（注13）：「ラヘジュとアデンの諸王の物語における時の贈り物」 アハマド・ファドル・ムフセン・アルアブダリー著 P.245 サイド・パシャ書簡の翻訳

第一次世界大戦当時以来、イマーム・ヤヒヤーが南部でトルコ軍がイギリス軍と戦争した時に採った政策、またラヘジュとその他の取引、つまりサイド・パシャ少将の呼び掛けを承諾しなかった中立的な立場は、イマームとイギリス人達との間を近付けさせることはなかった。

イギリス人達はイマームの態度に満足せず、ホダイダ、アッリヒヤ、アッサリーフ、モカ等の北部のイエメンの港町に打撃を与えることになった。これは大英帝国とトルコの間で、前述のムードロス条約による和平締結で規定されたトルコ降伏後の軍隊の撤退が遅れている、と言う論拠によってな

れた。そしてイギリス軍はこれらの港町を占領し、当時のアシールの統治者ムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーにそれらを引き渡した。

諸港をイギリスが占領した事を契機に、アデンや南部に在住しているイギリス人の存在の合法的承認、北と南の国境線や境界線の制定、もしくはイギリスとトルコの国境合意に対する最低限の承認等についてイマームと取引する調書を採用した。

しかしそれらの事項は一つも取り上げられることはなく、周知の如く、西暦1921年1月31日彼等は港町をイドリーシーに渡した。前日の港やティハーマ等の町々をイギリス人達が支配した期間は3年間であった。そしてイマーム・ヤヒヤーは、ムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーの死後、ヘジラ暦1343年、西暦1924年までそこを所有することはなかった。「アルイドリーシー家とイマーム・ヤヒヤー」の章にやがて出て来る様に、彼の死後、後継者争いが続いたのであった。

この事に関して、歴史家のムハンマド・ブン・アハマド・アルウカイリー・アルアシーリーが次の様に主張している（注：14）。即ちイギリス人達はホダイダの占領を目的としていた。と言うのは彼の地をアデンの植民地と陸路で結び、植民地建設の為の出発の起点としてそこを採用しようとした為であった。

（注：14）：「イエメンのオスマーン統治」 ファルーク・オスマーン・アバーザ著 P. 410

そのための準備として、彼等は南部の諸首長達との間の事を基準にして、周辺の諸部族の首長達を誘惑し始めた。しかし彼等は失敗した。アルカハリー族はイマーム・ヤヒヤーへのイギリス人達の代表ジェイコブ氏を捕えた。バージル市においてその部族は彼を捕え、イマームの元に彼が到着するのを阻止したのであった。これにもかかわらず、後にイマームは、彼の軍隊に南部への進駐を命じた。そしてアッダーリウ県のアッダーリウ、アルアジュード、アッスアイブ、アルカティブを占領した。それはこの占領により、ホダイダや他のティハーマ地方諸港湾や諸都市の放棄を考えるにあたり、イギリス人達と取引しようとしたのであった。その計画が成功せず、北部のイエメン諸部族は、ホダイダのイギリス人達を攻撃することになった。その事によりイギリス人達に、ホダイダの住民達による、彼等の内の或る者達はオスマーン・トルコと結び付いていたのであるが、住民投票を強いることになった。そしてイギリス人達は後にホダイダとティハーマ地方の諸港と諸都市をムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーに渡すことになる。

「イエメン概説史、第5巻[イエメン現代史]P. 33-41」